

高向遺跡

(仮称) 丹保2号線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997年3月

河内長野市遺跡調査会

序 文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、高野街道に代表される和歌山や奈良へ向かう南河内の交通の要衝として発展してきた町です。

このため市内には数多くの文化財が残されています。

このような河内長野市も大阪市内への通勤圏に位置しているため住宅都市として近年、開発の波がおしよせてきています。

開発がもたらす文化財や自然に対する影響には大きいものがあります。特に、埋蔵文化財は開発と直接に結び付く大きな問題です。

遺跡に託されている河内長野の先人達のメッセージを現在の市民、更には未來の市民に伝えてゆかねばなりません。

本書は発掘調査の成果を収録しています。先人達のメッセージの一部でも理解するための資料として活用していただければ幸いです。

これらの発掘調査に協力していただきました施主の方々の埋蔵文化財への深いご理解に末尾ながら謝意を表するものです。

平成9年3月

河内長野市遺跡調査会
理事長 中尾謙二

例　　言

1. 本報告書は平成7年度に河内長野市遺跡調査会が河内長野市建設部道路交通課から委託を受けて実施した高向遺跡（TKO95-3）の発掘調査報告書である。
2. 調査は本市教育委員会教育部社会教育課文化財保護係主査尾谷雅彦と同係員鳥羽正剛を担当者として実施した。尚、内業整理は同嘱託中西和子の指導のもとに行った。
3. 調査にかかる事務は河内長野市遺跡調査会事務局長の濱田宗良（社会教育課課長補佐兼務）が主担した。
4. 本書の執筆は第1・2・4章を鳥羽、第3章をパリノ・サーヴェイ株式会社が行った。
5. 編集は尾谷と鳥羽が行い、東田幸子が補佐した。
6. 発掘調査及び内業整理については下記の方々の参加を得た。
喜多順子・小森光・阪木しづこ・重野真紀・杉本祐子・田川富子・中尾智行（現本市教育委員会）・中村嘉彦・林和宏・藤井美佐子・松尾和代・折本裕子・牟田口京子・写測エンジニアリング株式会社・株式会社島田組
7. 遺物及び遺構の一部の写真は中西が撮影した。
8. 本調査の記録はスライドフィルム等でも記録しており、広く一般の方々に活用されることを望むものである。

凡　　例

1. 本報告書に掲載されている標高はTPを基準としている。
2. 土色は『新版標準土色帖』による。
3. 平面測量は国家座標第VI系による5mメッシュを基準に実施した。
4. 図中の北は座標北である。
5. 本書の遺構名は下記の略記号をもちいた。
S D…溝 S K…土坑 N R…自然流路
6. 遺構の実測図の縮尺は、1/50・1/60・1/100・1/125・1/250である。
7. 遺物の実測図の縮尺は、土器1/4・石器2/3・銅銭原寸である。
8. 須恵器・瓦器・瓦質土器・須恵質土器・陶磁器の断面は黒塗り、土師器・土師質土器の断面は白抜きである。
9. 実測図の遺物番号と写真的遺物番号は一致する。

目 次

| | |
|------------------------|----|
| 序 文 | |
| 例 言 | |
| 凡 例 | |
| 目 次 | |
| 挿図目次 | |
| 表目次 | |
| 図版目次 | |
| 第1章 はじめに | 1 |
| 第1節 位置と環境 | 1 |
| 第2節 調査に至る経過 | 4 |
| 第2章 調査の結果 | 5 |
| 第3章 高向遺跡の古環境について | 15 |
| 第4章まとめ | 31 |

挿 図 目 次

| | |
|---|-------|
| 第1図 遺跡位置図 | 1 |
| 第2図 河内長野市遺跡分布図 (1/40000) | 2 |
| 第3図 調査区位置図 (1/6000) | 4 |
| 第4図 遺構配置模式図 (1/600) | 5 |
| 第5図 S D 9出土遺物実測図 | 6 |
| 第6図 S D 9遺構実測図 (1/125) | 6 |
| 第7図 S D11遺構実測図 (1/100) | 7 |
| 第8図 S D12出土遺物実測図 | 8 |
| 第9図 S D12・13遺構実測図 (1/50) | 8 |
| 第10図 包含層出土遺物実測図 (1) | 11 |
| 第11図 包含層出土遺物実測図 (2) | 12 |
| 第12図 遺構全体図 (1/250) 及び土層断面実測図 (1/60) | 13~14 |
| 第13図 試料採取地区 | 15 |
| 第14図 主要珪藻化石群集 | 19 |
| 第15図 主要花粉化石群集 | 21 |
| 第16図 植物珪酸体群集 | 23 |
| 第17図 珪藻化石 | 27 |

| | |
|------------------|----|
| 第18図 花粉化石 | 28 |
| 第19図 植物珪酸体 | 29 |

表 目 次

| | |
|----------------------|----|
| 第1表 河内長野市遺跡地名表 | 3 |
| 第2表 分析試料一覧 | 15 |
| 第3表 珪藻の生態性 | 16 |
| 第4表 珪藻分析結果 | 18 |
| 第5表 花粉分析結果 | 20 |
| 第6表 植物珪酸体分析結果 | 22 |

図 版 目 次

| | |
|--|--|
| 図版 1 遺構 1.NR 1(南東から)、 2.SD12・13(東から)、 3.調査区全景(上から) | |
| 図版 2 遺構 SD 9(北西から) | |
| 図版 3 遺物 SD 9 (1～3・5～7)、 SD12 (8)、 包含層 (9～13・16～18・20・ 21・26・28・29・37・38・40・43・47・48・50・52・54・58～63・65～67) | |

第1章 はじめに

第1節 位置と環境

高向遺跡は、河内長野市高向に所在する旧石器時代、縄文時代前期、弥生時代、古墳時代、奈良時代、中世の複合遺跡であることが既往調査の成果から判明している。地理的環境としては、和泉葛城山系を水源とする石川の左岸の中位段丘上、標高約150mに位置する。

歴史的環境としては、縄文時代では石川本流から天見川沿いに北から向野遺跡、喜多町遺跡、三日市遺跡、小塙遺跡の4遺跡があり、後期を中心とする土器が出土している。また、石川本流には高向遺跡や宮山遺跡があり、宮山遺跡からは中期後半の土器とともに堅穴住居も確認されている。

さらに三日市遺跡や小塙遺跡からは早期の押型文土器が出土している。これらの遺跡以外に高木遺跡、寺ヶ池遺跡、菱子尻遺跡からはサヌカイト片や石器が出土している。

弥生時代では石川左岸の塙谷遺跡や天見川右岸の三日市遺跡から中期の遺物が、大師山遺跡からは後期の遺物が出土している。

古墳時代では天見川を見下ろす位置に前期の前方後円墳である大師山古墳、中期の三日市遺跡の古墳群、後期の鳥帽子形古墳が分布している。石川本流の向野町から寿町にかけては五ノ木古墳、法師塚古墳、双子塚古墳などの古墳が分布していた。また、石川の左岸の上原町には塙穴古墳が現存している。集落遺跡では前期から中期にかけては天見川沿いに三日市遺跡があり、後期後半では同じく天見川沿いに喜多町遺跡、そして左岸段丘上に近接して小塙遺跡、加塙遺跡がある。

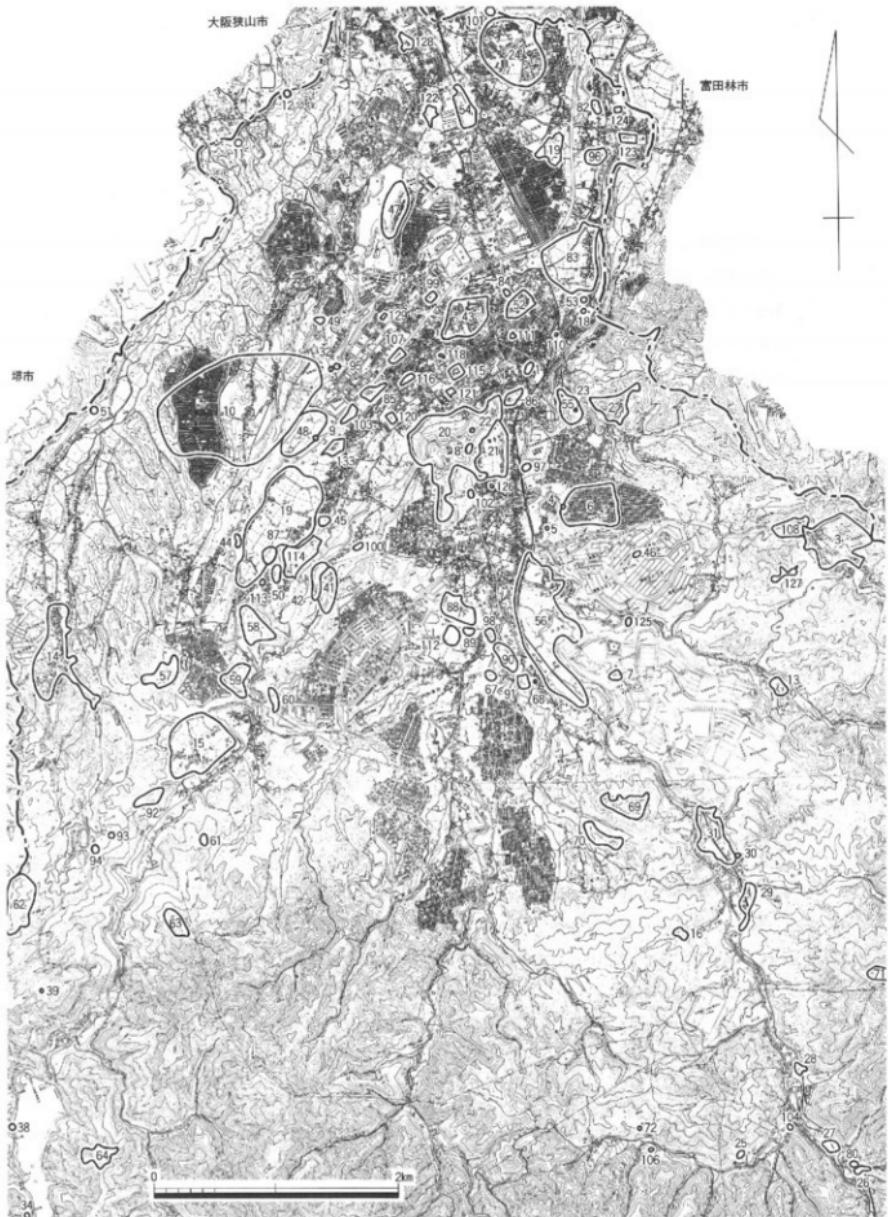
奈良時代では高向遺跡や喜多町遺跡、小塙遺跡から掘立柱建物や土坑が検出されている。また、本市と大阪狭山市との市境の小山田町からは2基の火葬墓が発見されている。

平安時代では向野遺跡、10世紀の掘立柱建物が検出された天見川沿いの尾崎遺跡、11～12世紀の掘立柱建物が検出された三日市遺跡、そして石川本流で野間里遺跡が確認されている。また市内にある觀心寺や金剛寺などの寺院は平安時代末頃から伽藍が整い多くの莊園を有していた。

中世になると交通路が整備され、各谷筋を通る高野街道や天野街道沿いに集落が分布している。特に、西高野街道では北から菱子尻遺跡や古野町遺跡があり、東高野街道では市町東遺跡や向野遺跡がある。西・東の高野街道が合流して天見川沿いを南に伸びる高野街道では、合流付近の長野神社遺跡や、喜多町遺跡、さらに南に三日市遺跡、尾崎遺跡、ジヨ



第1図 遺跡位置図



第2図 河内長野市遺跡分布図 (1/40000)

| 番号 | 文化財名跡 | 種類 | 時代 | 番号 | 文化財名跡 | 種類 | 時代 |
|------|---------------------|-----|---------|-------|-----------------|-----|----------|
| 1 | 長野 神社 遺跡 | 社寺 | 室町 | 67 | 加賀田 神社 遺跡 | 社寺 | 中世 |
| 2 | 河 合 寺 社寺 | | | 68 | 庚 壬 堂 遺跡 | 社寺 | |
| 3 | 巖 心 寺 社寺 | | 平安以降 | 69 | 石 仏 城 遺跡 | 城館 | 中世 |
| 4 | 大 嶺 山 古 墳 古墳 (前期) | | | 70 | 佐 近 城 遺跡 | 城館 | 中世 |
| 5 | 大 嶺 山 南 古 墳 古墳 (後期) | | | 71 | 旗 尾 城 遺跡 | 城館 | 中世 |
| 6 | 大 嶺 山 遺跡 集落 | | 亦生 (後期) | 72 | 葛 城 第 16 築 堆 積塚 | | |
| 7 | 奥 指 寺 社寺 | | | (73) | 葛 城 第 18 築 堆 積塚 | | |
| 8 | 鳥 桐 子 形 八 緒 神社 社寺 | | 室町 | (74) | 葛 城 第 19 築 堆 積塚 | | |
| 9 | 冢 穴 古 墳 古墳 | | 古墳 (後期) | (75) | 笠 尾 墓 | 城館 | 中世 |
| 10 | 長 泊 宮 跡 群 生産 | | 平安~近世 | (76) | 大 沢 墓 | 城館 | 中世 |
| 11 | 小 山 1 号 古 墓 墓基 | | 奈良 | (77) | 三 国 山 積 墓 | 経塚 | |
| 12 | 小 山 2 号 古 墓 墓基 | | 奈良 | (78) | 光 運 寺 | 社寺 | |
| 13 | 延 命 寺 社寺 | | | (79) | 猿 子 城 遺跡 | 城館 | 中世 |
| 14 | 金 刚 寺 社寺 | | 平安以降 | 80 | 蟹 井 湖 神社 遺跡 | 社寺 | |
| 15 | 日 野 觀 音 寺 遺跡 | 社寺 | 中世 | (81) | 川 上 神 社 遺跡 | 社寺 | |
| 16 | 地 墓 寺 社寺 | | | 82 | 千 代 田 神社 遺跡 | 社寺 | |
| (17) | 岩 游 寺 社寺 | | 平安以降 | 83 | 向 野 遺跡 | 跡・塚 | 纏文・平安~近世 |
| 18 | 五 / 木 古 墓 古墳 | | 古墳 (後期) | 84 | 古 野 北 遺跡 | 散布地 | 中世 |
| 19 | 高 向 遺跡 集落 | | 旧石器・中世 | 85 | 上 原 北 遺跡 | 集落 | 中世 |
| 20 | 鳥 桐 子 形 城 遺跡 | 城館 | 中世~近世 | 86 | 大 日 寺 遺跡 | 社寺 | 弥生・中世 |
| 21 | 高 多 町 遺跡 集落 | | 縄文・中世 | 87 | 高 向 南 遺跡 | 散布地 | 縄文 |
| 22 | 鳥 桐 子 形 古 墓 古墳 | | 古墳 (後期) | 88 | 小 塚 遺跡 | 集落 | 縄文~奈良 |
| 23 | 末 広 窯 生産 | | | 89 | 加 塚 遺跡 | 集落 | 古墳 (後期) |
| 24 | 塙 谷 遺跡 敷布地 | | 縄文・中世 | 90 | 尾 岐 遺跡 | 集落 | 古墳~中世 |
| 25 | 浅 谷 八 緒 神社 社寺 | | | 91 | ジョウノマエ 遺跡 | 城館? | 中世 |
| 26 | 蟹 井 泊 南 遺跡 | 散布地 | 中世 | 92 | 仁 王 山 城 遺跡 | 城館 | 中世 |
| 27 | 蟹 井 泊 北 遺跡 | 散布地 | 中世 | 93 | タ コ ラ 城 遺跡 | 城館 | 中世 |
| 28 | 天 真 駅 北 方 遺跡 | 散布地 | 中世 | 94 | 岩 立 城 遺跡 | 城館 | 中世 |
| 29 | 千 手 口 駿 川 南 遺跡 | 散布地 | 中世 | 95 | 上 原 近 世 瓦 窯 生産 | | 近世 |
| 30 | 岩 窯 藥 師 墓基 | | 近世 | 96 | 市 町 東 遺跡 | 散布地 | 弥生・中世 |
| 31 | 清 水 遺跡 敷布地 | | 中世 | 97 | 上 田 町 窯 遺跡 | 生産 | 近世 |
| 32 | 伝 「仲哀廟」古 墓 古墳? | | | 98 | 尾 岐 北 遺跡 | 散布地 | 古墳 |
| (33) | 堂 地 附 窯 墓 寺 社寺 | | 近世 | 99 | 西 之 山 町 遺跡 | 集落 | 中世 |
| 34 | 瀧 烟 埋 墓 墓基 | | 近世 | 100 | 野 聞 里 遺跡 | 集落 | 平安 |
| (35) | 中 村 何 弥 励 花 荘 遺跡 | 社寺 | 近世 | 101 | 鳴 尾 遺跡 | 散布地 | 中世 |
| (36) | 東 の 村 観 音 寺 遺跡 | 社寺 | 近世 | 102 | 上 田 町 遺跡 | 散布地 | 古墳・中世 |
| (37) | 西 の 村 観 音 寺 遺跡 | 社寺 | 近世 | 103 | 上 原 中 遺跡 | 散布地 | 古墳・中世 |
| 38 | 浦 水 阿 労 花 荘 遺跡 | 社寺 | 近世 | 104 | 小 野 墓 | 墳墓 | |
| 39 | 瀧 氏 弥 勅 花 荘 遺跡 | 社寺 | 近世 | (105) | 葛 城 第 17 築 堆 積塚 | | 経塚 |
| (40) | 宮 の 下 内 墓 墓基 | | 古墳 | 106 | 薬 師 堂 遺跡 | 社寺 | 中世以降 |
| 41 | 宮 山 古 墓 古墳? | | 古墳 | 107 | 野 作 遺跡 | 集落 | 中世 |
| 42 | 宮 山 遺跡 敷布地 | | 縄文・中世 | 108 | 寺 元 遺跡 | 集落 | 奈良・中世 |
| 43 | 西 代 遣 滯 屋 墓 墓基 | | 城館 | (109) | 鳴 原 遺跡 | 散布地 | 中世 |
| | | | 敷布地 | 110 | 法 師 墓 古 墓 遺跡 | 古墳 | |
| 44 | 上 原 町 墓 地 墓基 | | | 111 | 上 原 山 古 墓 遺跡 | 古墳 | |
| 45 | 物 寺 遺跡 | 社寺 | 縄文 | 112 | 西 一 潟 遺跡 | 集落 | 古墳・中世 |
| 46 | 要 山 遺跡 祀祀 | | 中世~近世 | 113 | 地 福 寺 遺跡 | 社寺 | 近世 |
| 47 | 寺 ケ 沼 遺跡 | 散布地 | 縄文 | 114 | 宮 の 下 遺跡 | 集落 | 平安~中世 |
| 48 | 上 原 遺跡 | 散布地 | 縄文~近世 | 115 | 栄 町 遺跡 | 散布地 | 弥生・古墳 |
| 49 | 住 吉 神 社 遺跡 | 社寺 | | 116 | 鶴 町 遺跡 | 散布地 | 中世 |
| 50 | 高 向 神 社 遺跡 | 社寺 | 中世 | (117) | 太 井 遺跡 | 散布地 | 中世 |
| 51 | 高 有 が 原 神 社 遺跡 | 社寺 | | 118 | 錦 町 北 遺跡 | 社寺 | 弥生・中世 |
| 52 | 勝 所 蔵 河 州 出 所 遺跡 | 城館 | | 119 | 市 町 西 遺跡 | 散布地 | 縄文・中世 |
| 53 | 双 子 墓 古 墓 遺跡 | | 古墳 | 120 | 宋 町 南 遺跡 | 散布地 | 中世 |
| 54 | 斐 子 房 遺跡 | 散布地 | 縄文~中世 | 121 | 栄 町 東 遺跡 | 散布地 | 弥生・中世 |
| 55 | 河 合 寺 城 遺跡 | 城館 | | 122 | 桶 町 東 遺跡 | 散布地 | 弥生 |
| 56 | 三 日 市 遺跡 | 集落 | 旧石器~近世 | 123 | 沙 の 宮 町 南 遺跡 | 散布地 | 奈良 |
| 57 | 日 の 谷 城 遺跡 | 城館 | 室町 | 124 | 沙 の 宮 町 遺跡 | 散布地 | 中世 |
| 58 | 高 木 遺跡 敷布地 | | 縄文 | 125 | 神 カ 丘 近 世 墓 墓基 | 墳墓 | 近世 |
| 59 | 沙 の 山 城 遺跡 | 城館 | 中世 | 126 | 増 福 寺 遺跡 | 社寺 | 中世 |
| 60 | 峰 山 城 遺跡 | 城館 | 中世 | 127 | 三 味 城 遺跡 | 跡・塚 | 中世・近世 |
| 61 | 桶 南 山 城 遺跡 | 城館 | 中世 | 128 | 松 林 寺 遺跡 | 社寺 | 近世 |
| 62 | 国 見 城 遺跡 | 城館 | 中世 | 129 | 昭 宗 町 遺跡 | 散布地 | 中世 |
| 63 | 筑 城 遺跡 | 城館 | 中世 | *130 | 東 高 野 街 道 | 街道 | 平安以降 |
| 64 | 篠 現 城 遺跡 | 城館 | 中世 | *131 | 西 高 野 街 道 | 街道 | 平安以降 |
| (65) | 天 神 社 遺跡 | 社寺 | | *132 | 高 野 街 道 | 街道 | 平安以降 |
| (66) | 葛 城 第 15 築 堆 積塚 | | | 133 | 上 原 東 遺跡 | 散布地 | 弥生・中世・近世 |

() は地図範囲外 * は街道につき地図上にプロットせず

第1表 河内長野市遺跡地名表

ウノマエ遺跡、清水遺跡、千早口駅南遺跡（寺院跡も含む）、天見駅北方遺跡、蟹井瀬北遺跡、蟹井瀬南遺跡と続く。これらは明らかに街道とともに発達した遺跡である。集落跡以外では、街道を見下ろす尾根上に南北朝から戦国時代にかけての城塞が20数ヶ所分布している。生産遺跡としては平安時代から中世にかけての炭焼窯と思われる窯跡が市内の山間部に分布している。

近世になると近江膳所藩や河内西代藩の陣屋跡があり、さらに、確認数は少ないが近世瓦窯跡も、地元の伝承通り確認されている。

第2節 調査に至る経過

本次調査の原因となった（仮称）丹保2号線整備事業用地についても周知の埋蔵文化財包蔵地の高向遺跡内にあるため、計画段階から埋蔵文化財の取り扱いについて協議を進めていた。この協議の結果、平成7年度に事業主体者である河内長野市建設部道路交通課（以下、市建設部と略す）と本市教育委員会は（以下、市教委と略す）建設予定部分について発掘調査が必要という結論となり、平成7年7月25日に市教委宛に埋蔵文化財発掘調査依頼書が提出された。その後、市建設部から市教委宛に平成7年10月20日、文化財保護法第57条の3の発掘通知が提出され、大阪府を経由し文化庁に通知した。以上の事務手続き終了後、市教委は、調査機関として河内長野市遺跡調査会（以下、調査会と略す）に委託するよう回答し、市建設部は調査会に埋蔵文化財発掘調査を委託し、平成7年10月19日に業務委託契約を締結した。調査面積は約1300m²で、調査期間は平成7年10月30日から同年12月22日までである。また内業調査については平成8年5月29日に業務委託契約を締結した。調査期間は同年5月30日から平成9年3月14日までである。



第3図 調査区位置図 (1/6000)

第2章 調査の結果

1 概要

調査区は石川左岸の中位段丘上の後背湿地にあたり、1994年度の調査（註1）とは対照的に奈良時代の遺構の密度は希薄であった。しかし、中世になると湿地内の微高地を利用して一時的に遺構が営まれることがわかった。

2 層序

遺構面は現地表下0.7mで検出された。基本層序は耕土（層厚0.2m）、床土（同0.05m）、10YR7/6明黄褐色礫混じりシルト（同0.15m）、10YR6/2灰黄褐色礫混じり極細砂（同0.05m）、10YR6/4にぶい黄橙色礫混じりシルト（同0.05m）、2.5YR6/3にぶい黄色礫混じり細砂（同0.05m）、2.5Y6/2灰黄色礫混じり細砂（同0.15m）であった。

3 遺構と遺物

（1）溝

[SD 1]

SD 1は調査区の北側に位置する。遺構の南端は調査区外に及ぶため詳細は不明である。検出された遺構の規模は長さ2.62m、北端の幅0.28m、南端の幅0.4m、北端の深さ0.03m、南端の深さ0.07mを測る。遺構の埋土は2.5YR6/2灰黄褐色細砂混じりシルトであった。

遺物は出土しなかった。

[SD 2]

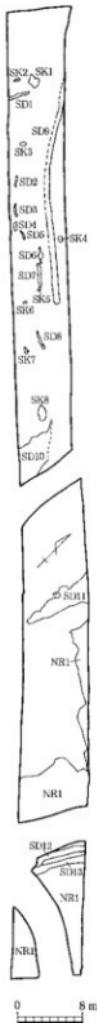
SD 2はSD 1の南東9.5mに位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長さ1.42m、幅0.24m、深さ0.03mを測る。遺構の埋土は10YR6/2灰黄褐色粘土混じり細砂であった。

遺物は出土しなかった。

[SD 3]

SD 3はSD 2の南東2mに位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長さ1.72m、東端の幅0.06m、西端の幅0.19m、東端の深さ0.06m、西端の深さ0.02mを測る。遺構の埋土は10YR6/2灰黄褐色粘土混じり細砂であった。

遺物は出土しなかった。



第4図 遺構配置
模式図(1/600)

[S D 4]

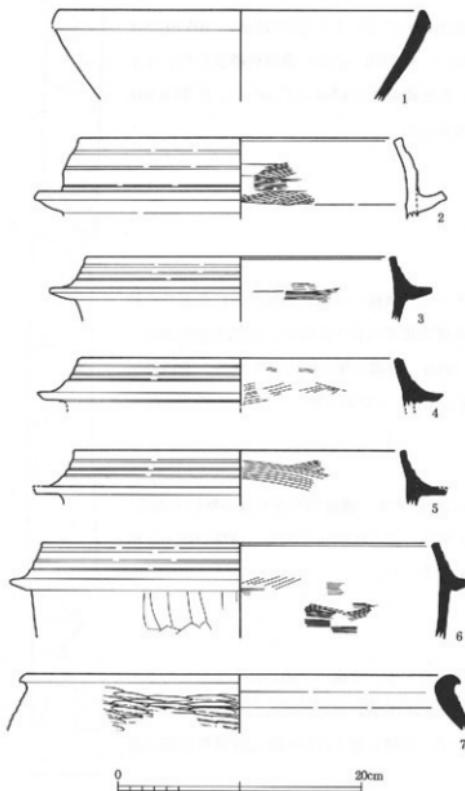
S D 4 は S D 3 の南東に近接する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長さ1.16m、幅0.6m、深さ0.05mを測る。遺構の埋土は10 YR6/2灰黄褐色粘土混じり細砂であった。

遺物は須恵器、土師質土器の細片が出土したが、図化できなかった。

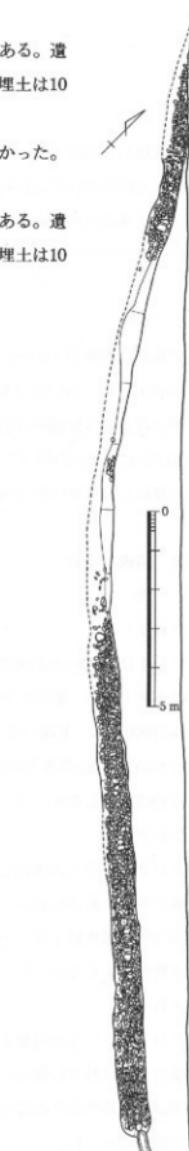
[S D 5]

S D 5 は S D 4 の東側に近接する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長さ1.36m、幅0.28m、深さ0.05mを測る。遺構の埋土は10 YR6/2灰黄褐色粘土混じり細砂であった。

遺物は出土しなかった。



第5図 SD 9 出土遺物実測図



第6図 SD 9 遺構実測図(1/125)

[S D 6]

S D 6 は S D 5 の東 2 m に位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長さ 2.12m、東端の幅 0.14m、中央の幅 0.64m、西端の幅 0.08m、深さ 0.05m を測る。遺構の埋土は 2.5YR6/2 灰黄褐色細砂混じりシルトであった。

遺物は出土しなかった。

[S D 7]

S D 7 は S D 6 の南東側に近接する。南東端の一部が S K 5 によって切られているが、遺構の平面形は不整形とわかる。検出された遺構の規模は長さ 2.96m、東端の幅 0.24m、西端の幅 0.36m、東端の深さ 0.05m、西端の深さ 0.04m を測る。遺構の埋土は 2.5YR6/2 灰黄褐色細砂混じりシルトであった。

遺物は出土しなかった。

[S D 8]

S D 8 は S D 7 の南東 5.5m に位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長さ 2.46m、東端の幅 0.64m、中央の幅 0.44m、西端の幅 0.08m、深さ 0.02m～0.08m を測る。遺構の埋土は 2.5YR6/2 灰黄褐色細砂混じりシルトであった。

遺物はサヌカイトの剝片が出土したが、細片のため図化できなかった。

[S D 9] (第 5・6 図、図版 2・3)

S D 9 は調査区の北側に位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の北端は調査区外に及ぶため詳細は不明である。遺構内にはこぶし大の川原石や角石が詰められ、暗渠を成しているようである。検出部分の中央部は攪乱により一部が欠損しているが、南北両端のように当初石が詰められていたと考えられる。検出した遺構の規模は長さ 27m、幅 0.74m、深さ 0.04～0.13m を測る。

遺物は瓦質の插鉢(1)・土釜(3～6)・甕(7)、土師質土器の土釜(2)が実測できた。

[S D 10]

S D 10 は S D 9 の南東 14.5m に位置する。南北軸を持つが北側は攪乱を受け、南側は調査区外に及ぶため詳細は不明である。検出した遺構の規模は長さ 4.62m、幅 3.76m、北端の深さ 0.12m、南端の深さ 0.09m を測る。遺構の埋土は 10YR4/2 灰黄褐色細砂混じりシルトであった。

出土した遺物にはサヌカイトの剝片、瓦器があったが、細片のため図化できなかった。

[S D 11] (第 7 図)

S D 11 は調査区の中央に位置する。遺構の北側は調査区外に及ぶため詳細は不明である。検出された遺構の規模



第 7 図 S D 11 遺構実測図 (1/100)

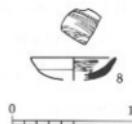
は長さ8.58m、北端の幅2.86m、南端の幅0.6m、北端の深さ0.18m、南端の深さ0.04mを測る。遺構の埋土は2.5YR6/2灰黄色疊混じり細砂であった。

遺物は須恵器、土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

〔S D12〕(第8・9図、図版1・3)

S D12は調査区の南側に位置する。遺構は南北軸であるが、南北両端が調査区外に及ぶため詳細は不明である。検出された遺構の規模は長さ6.4m、北端の幅0.66m、中央の幅0.66m、南端の幅1.1m、北端の深さ0.21m、中央の深さ0.23m、南端の深さ0.19mを測る。軸方向はN-33°-Eを示す。遺構の埋土は2.5Y6/2灰黄色シルト混じり細砂であった。

出土した遺物には土師器、須恵器、土師質土器、瓦器があつた。瓦器の皿(8)が図化できた。

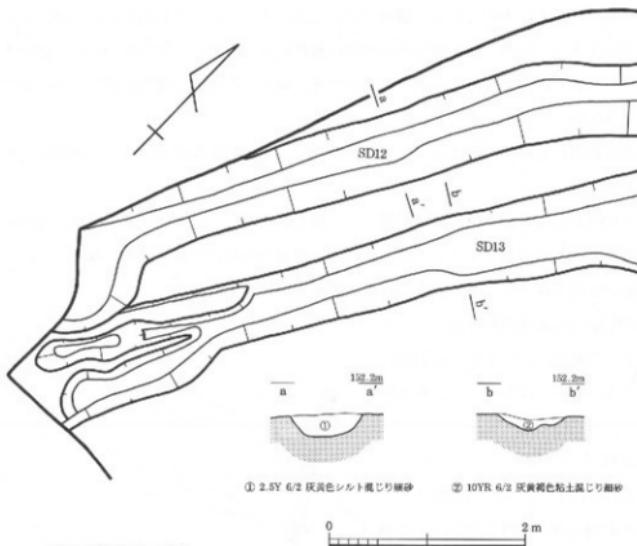


第8図 S D12出土遺物実測図

〔S D13〕(第9図、図版1)

S D13はS D12の東側に平行して位置するが、S D12に南端の一部を切られている。遺構は南北軸であるが、南北両端が調査区外に及ぶため詳細は不明である。検出された遺構の規模は長さ6.8m、北端の幅1.04m、中央の幅0.75m、南端の幅1.04m、北端の深さ0.12m、中央の深さ0.18m、南端の深さ0.12mを測る。軸方向はN-34°-Eを示す。遺構の埋土は10YR6/2灰黄褐色粘土混じり細砂であった。

遺物は須恵器、土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。



第9図 S D12・13遺構実測図 (1/50)

(2) 土坑

[SK 1]

SK 1はSD 1の北側に近接する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸1.72m、短軸1.4m、深さ0.14mを測る。遺構の埋土は2.5YR6/2灰黄色シルト混じり細砂であった。

遺物は出土しなかった。

[SK 2]

SK 2はSK 1の南西1mに位置する。遺構の平面形は不整形な長楕円形を呈する。遺構の規模は長径0.88m、短径0.35m、深さ0.02mを測る。遺構の埋土は10YR6/2灰黄褐色粘土混じり細砂であった。

遺物は出土しなかった。

[SK 3]

SK 3はSK 2の南東7.5mに位置する。遺構の平面形は長楕円である。遺構の規模は長径0.79m、短径0.48m、深さ0.08mを測る。遺構の埋土は10YR6/2灰黄褐色粘土混じり細砂であった。

遺物は出土しなかった。

[SK 4]

SK 4はSD 9の東側に近接する。遺構の平面形は瓢形である。遺構の規模は長軸0.79m、短軸0.57m、深さ0.12mを測る。遺構の埋土は10YR6/2灰黄褐色粘土混じり細砂であった。

遺物は出土しなかった。

[SK 5]

SK 5はSD 7の南東端を切って位置する。遺構の平面形は不整形な長楕円形を呈する。遺構の規模は長径0.63m、短径0.38m、深さ0.05mを測る。遺構の埋土は2.5YR6/2灰黄褐色細砂混じりシルトであった。

遺物は瓦器が出土したが、細片のため図化できなかった。

[SK 6]

SK 6はSK 5の南2mに位置する。遺構の平面形は長楕円形を呈する。遺構の規模は長径0.54m、短径0.29m、深さ0.05mを測る。遺構の埋土は2.5YR6/2灰黄褐色細砂混じりシルトであった。

遺物はサスカイトの剝片が出土したが、細片のため図化できなかった。

[SK 7]

SK 7はSK 6の南東5.5mに位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸0.92m、短軸0.33m、深さ0.09mを測る。遺構の埋土は10YR6/2灰黄褐色粘土混じり細砂であった。

遺物は出土しなかった。

[SK 8]

SK 8はSK 7の南東6.5mに位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸1.89m、短軸1.02m、深さ0.07mを測る。遺構の埋土は2.5YR6/2灰黄褐色細砂混じりシルトであった。

遺物は出土しなかった。

(3) 自然流路

[NR 1] (図版1)

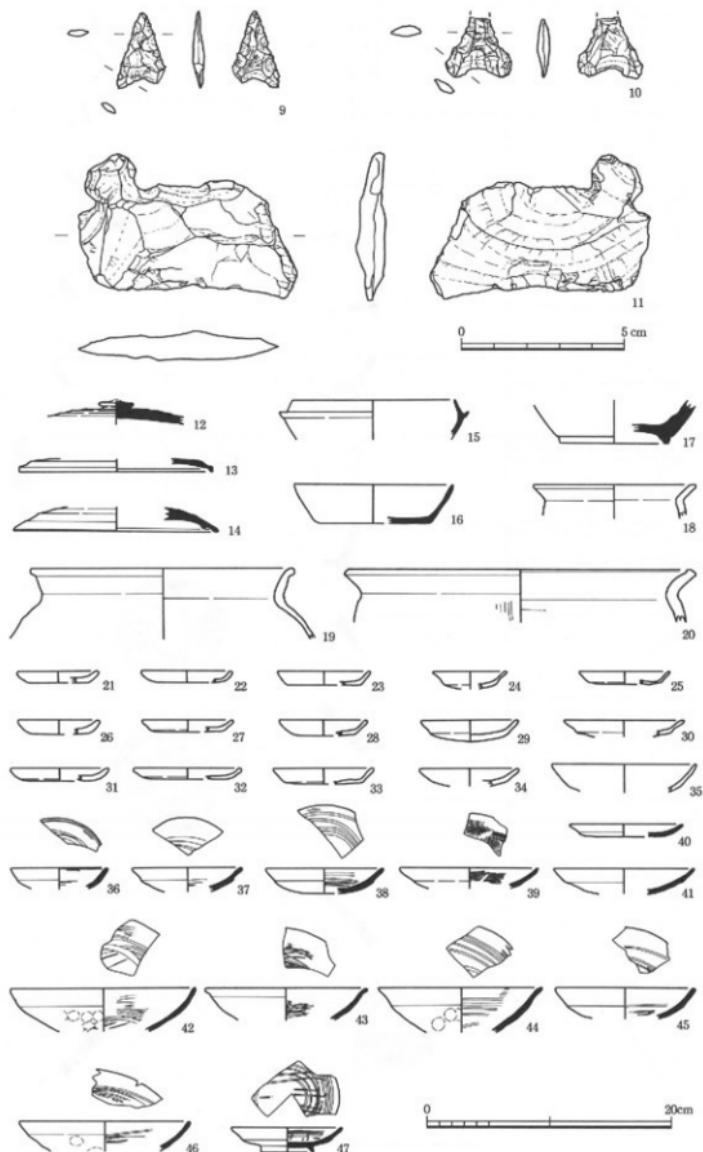
NR 1は調査区の南東側に広がって位置する。東端と南北の両端は検出していないため詳細な規模は不明である。検出した遺構の規模は幅45m、長さ8m、深さ0.2mを測る。遺構の埋土は10YR4/4褐色極細砂であった。

遺物はサヌカイトの剝片、須恵器、土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかつた。

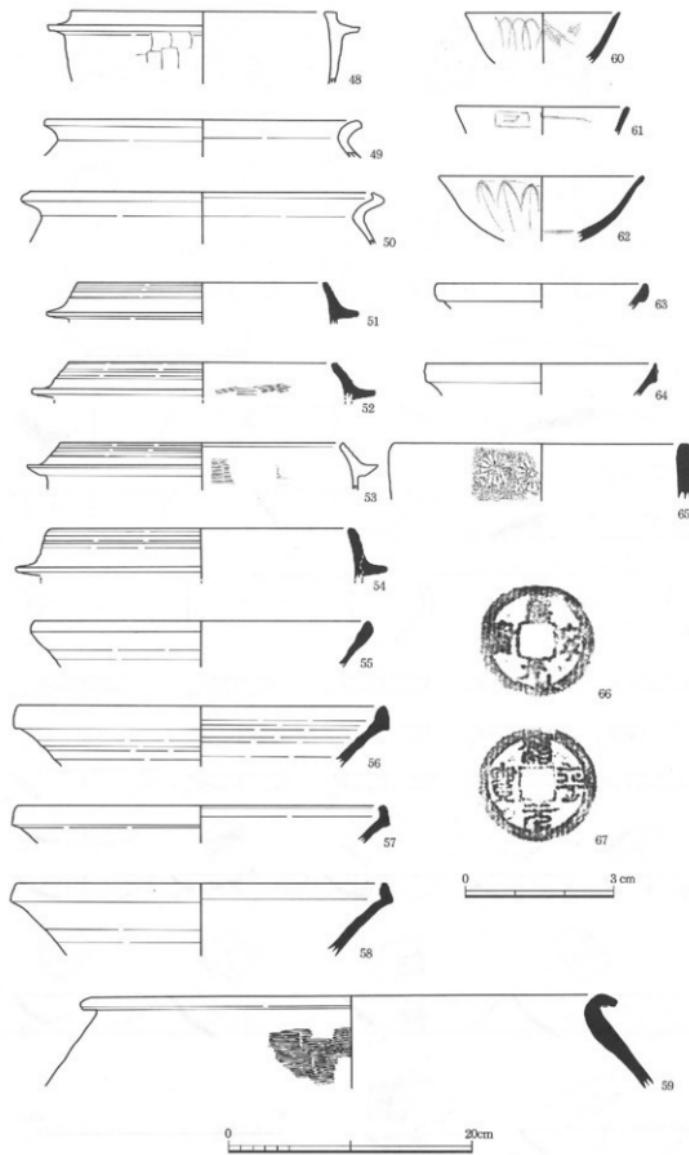
(4) 包含層(第10・11図、図版3)

包含層からの出土遺物にはサヌカイトの石鎌(9・10)・石匙(11)、須恵器の壺蓋(12~14)・壺身(15・16)・壺(17)、土師器の甕(18~20)、土師質土器の皿(21~34)・塊(35)・土釜(48~50・53)、瓦器の皿(36~38)・塊(41~46)・小型瓦器塊(47)、瓦質土器の皿(39~40)・土釜(51・52・54)・甕(59)・火鉢(65)、須恵質土器の練鉢(55~58)、青磁の碗(60~62・64)、白磁の碗(63)、熙寧元寶(66)、治平元寶(67)があつた。

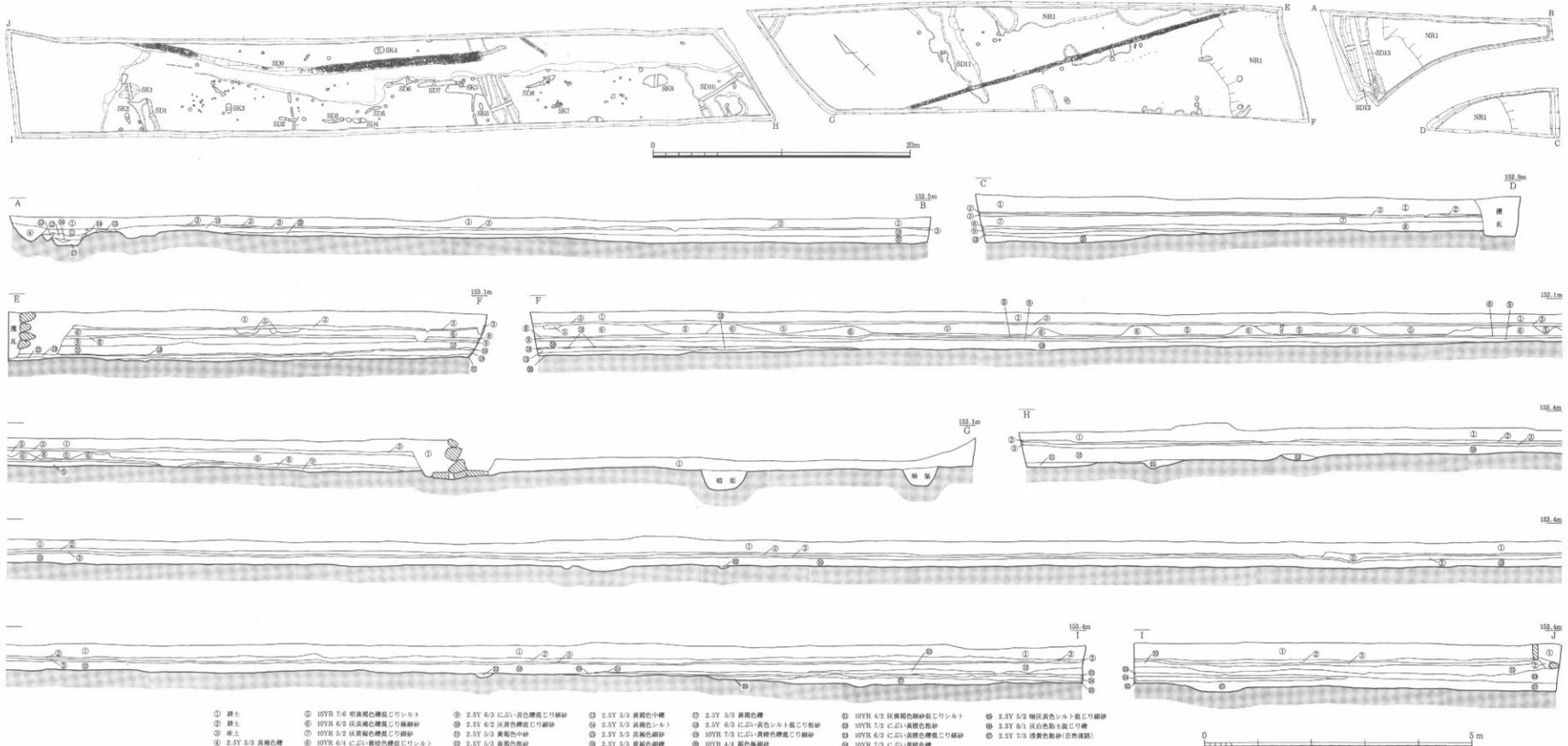
(註1)『河内長野市遺跡調査会報Ⅳ 高向遺跡』河内長野市遺跡調査会 1996年3月



第10図 包含層出土遺物実測図(1)



第11図 包含層出土遺物実測図(2)



第12図 遺構全体図 (1/250) 及び土層断面実測図 (1/60)

第3章 高向遺跡の古環境について

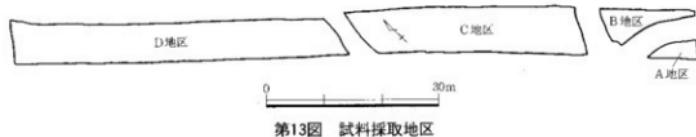
はじめに

高向遺跡は、石川左岸に広がる中低位段丘上に位置する旧石器～中世に至る複合遺跡である。これまでの発掘調査により、奈良時代・平安時代の遺構は段丘縁辺部の一部に限って分布していること、鎌倉時代初頭には建物をはじめとする遺構の分布域が拡がり、遺跡の範囲が段丘面全体に及ぶことなどが確認されている。

今回は、前回微化石の保存状態が悪く、十分な検討ができなかった奈良時代前後～中世の堆積環境および古植生の推定を目的として、珪藻分析、花粉分析を実施する。また、引き続き本遺跡での稻作の消長を把握するため、植物珪藻酸体分析を実施する。

1 試料

分析用試料は、A地区、C地区、D地区の土層断面から採取した合計23点である。試料採取位置および層相については、第13図・第2表に示す。



第13図 試料採取地区

| 番号 | 試料名 | 層相 | 時代等 | 番号 | 試料名 | 層相 | 時代等 |
|----|------------|---------------|-------|----|------------|--------------|--------|
| 1 | A地区 西壁 15層 | 灰青褐色縞混じり繊砂 | 中世 | 21 | C地区 | 後青灰色縞混じり繊砂 | |
| 2 | A地区 西壁 8層 | にぶい黄褐色縞混じりシルト | 奈良 | 22 | C地区 | 灰褐色縞混じり繊砂 | |
| 3 | A地区 西壁 9層 | にぶい黄褐色縞混じり繊砂 | 奈良 | 23 | C地区 | 褐色縞混じり繊砂 | |
| 4 | A地区 西壁 11層 | にぶい黄色シルト混じり繊砂 | | 12 | D地区 西壁 4層 | 灰褐色縞混じり繊砂 | 中世 |
| 5 | A地区 西壁 5層 | 褐色縞混砂 | | 13 | D地区 西壁 5層 | 灰褐色縞混じり繊砂 | 奈良 |
| 6 | C地区 西壁 7層 | 灰青褐色縞混じり繊砂 | 中世(?) | 14 | D地区 西壁 6層 | 灰褐色縞混じりシルト | |
| 7 | C地区 西壁 8層 | にぶい黄褐色縞混じりシルト | 奈良 | 15 | D地区 北壁 4層 | 灰褐色縞混じり繊砂 | 中世 |
| 8 | C地区 西壁 9層 | にぶい黄褐色縞混じり繊砂 | 奈良 | 16 | D地区 北壁 8層 | にぶい黄褐色縞混じり繊砂 | 奈良時代以前 |
| 9 | C地区 西壁 4層 | 灰褐色縞混じり繊砂 | 奈良 | 17 | D地区 北壁 10層 | 暗灰褐色シルト混じり繊砂 | |
| 10 | C地区 西壁 11層 | にぶい黄色シルト混じり繊砂 | | 18 | D地区 北壁 11層 | 灰褐色粗砂 | 自然風化 |
| 11 | C地区 西壁 5層 | 褐色縞混砂 | | 19 | D地区 北壁 | 暗褐色シルト | 奈良 |
| 20 | C地区 | 灰褐色縞混砂混じりシルト | | | | | |

第2表 分析試料一覧

2 分析方法

(1) 珪藻分析

試料を湿重で約5 g秤量し、過酸化水素水、塩酸の順に化学処理し、試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。自然沈降法で粘土分、傾斜法で砂分を除去した後、適当量計り取りカバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入する。検鏡は、

| 塩分濃度に対する区分 | 塩分濃度に対する適応性 | 生育環境(例) |
|---|--|---|
| 海水生理 海水生種 (<i>Polyhalophiles</i>) | 塩分濃度0.05%以上に出現 | 低度熱帯海藻、塩水湖 |
| 高塩生種 (<i>Euhalophiles</i>) | 海水生種、塩分濃度30.0~65.0%に出現 | 一般海域 (ex 大陸棚及びそれ以前の海城) |
| 汽水生理 中塩生種 (<i>Mesohalophiles</i>) | 塩分濃度 0.5‰~30.0‰に出現 地中中塩種 (G・Mesohalophiles) | 河口、内湾、沿岸、塩水湖、海など |
| 淡水生理 低塩生種 (<i>Oligohalophiles</i>) | 淡水生種、塩分濃度0.5‰以下に出現 塩分・pH・底水に対する適応性 | 一般水域 (ex 湖、沼、河川、沿岸地、泉)、 生物環境 (例) |
| 塩分に対する 適応性種 に対する 適応性種 | 淡水から海水によく生育する 海水から最もよく生育する 海水からどちらにもよく生育する 海水からどちらにもよく生育する | 高塩耐候 (海水上陸、塩作土壠) 一般水場 (潮路、河川、沿岸地 etc) 温带、温地、温地 |
| 適応性 広域性種 狭域性種 | 塩分度0.0まで高い範囲の塩分濃度に適応して 出現する | 一般淡水~汽水域 |
| pHに対する 適応性種 | pH.7.0以下に出現、pH.5以下に酸性水域で最もよく生 育する | 温带、温地、河口潮 (酸性水域) |
| 対する 適応性種 | pH.7.0付近に出現、pH.9.0まで最もよく生育する | 温带、温地、沿岸地 |
| 対する 適応性種 | pH.7.0付近の中性水域で最もよく生育する | 一般水系 (ex 湖沼、池沼、河川) |
| 対する 適応性種 | pH.7.0付近に出現、pH.9.0まで最もよく生育する | 温带、温地、温地 |
| 対する 適応性種 | pH.5以上のアルカリ性水域でのみ出現する | アルカリ性水域 (少ない) |
| 海水に 対する 適応性種 | 此水のみ出現する | 流入水のない潮沼、泥沼 |
| 海水に 対する 適応性種 | 此水に特徴的であるが、海水にも出現する | 潮沼、池沼、或れの疊かかな川 |
| 海水に 対する 適応性種 | 此水にも海水にも普通に出現する | 河川、川、池沼、池沼 |
| 海水に 対する 適応性種 | 海水に特徴的であるが、止水にも出現する | 河川、川、小川、上流域 |
| 海水に 対する 適応性種 | 海水にのみ出現する | 河川、川、底水の疊い川、潮沼、上流域 |
| 淡水種 対する 適応性種 | 好気的 (<i>Aerophilous habitat</i>) 水城以下の常に大気にさらされた特殊な環境に生育する 種類の一例で、多少の湿気と光さえあれば、土壌表 層下10cmの位置に生育可能。特に、上層中に生育す る陸生植物を土壤細菌という | ・ 土壤細菌中の土壌に生えたコケに付着 ・ 木の根元や幹に生えたカケリ科に付着 ・ 磨いた岩の表面やそれに生えたコケに付着 ・ 開拓内で先が当たった所に生えたコケに付着 |

第3表 珪藻の生態性

光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（珪藻化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、K.Krammer and Lange-Bertalot (1986・1988・1991a・1991b)、K.Krammer (1992)などを用いる。同定結果は、産出種をアルファベット順に並べた一覧表で示す。堆積環境の解析にあたり、塩分濃度に対する適応性から産出種を海水生種、海水～汽水生種、汽水生種、淡水生種に分類し、淡水生種については更に塩分・水素イオン濃度 (pH)・流水に対する適応性に基づいて生態性分類する。そして、主要な分類群について、主要珪藻化石の層位分布図を作成する。図中の海水～淡水生種の比率と各種産出率は全体基數、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基數とした相対頻度で算出する。

(2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類 (Taxa) について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基數として百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

(3) 植物珪酸体分析

試料約5 gについて、過酸化水素水と塩酸による有機物と鉄分の除去、超音波処理(80 W, 250kHz, 1分間)による試料の分散、沈降法による粘土分の除去、ポリタングステン酸ナトリウム(比重2.5)による重液分離を順に行い、物理・化学処理で植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈した後、カバーガラスに滴下し、乾燥させる。その後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

検鏡は光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現するイネ科植物の葉部(葉身と葉鞘)の短細胞に由来する植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身の機動細胞に由来する植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、同定・計数する。なお、同定には、近藤・佐瀬(1986)の分類を参考にした。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数を一覧表で示す。また、各種類の出現傾向から、生育していたイネ科植物を検討するために、植物珪酸体組成図を作成する。出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基準として百分率で算出する。

3 結果

(1) 珪藻化石

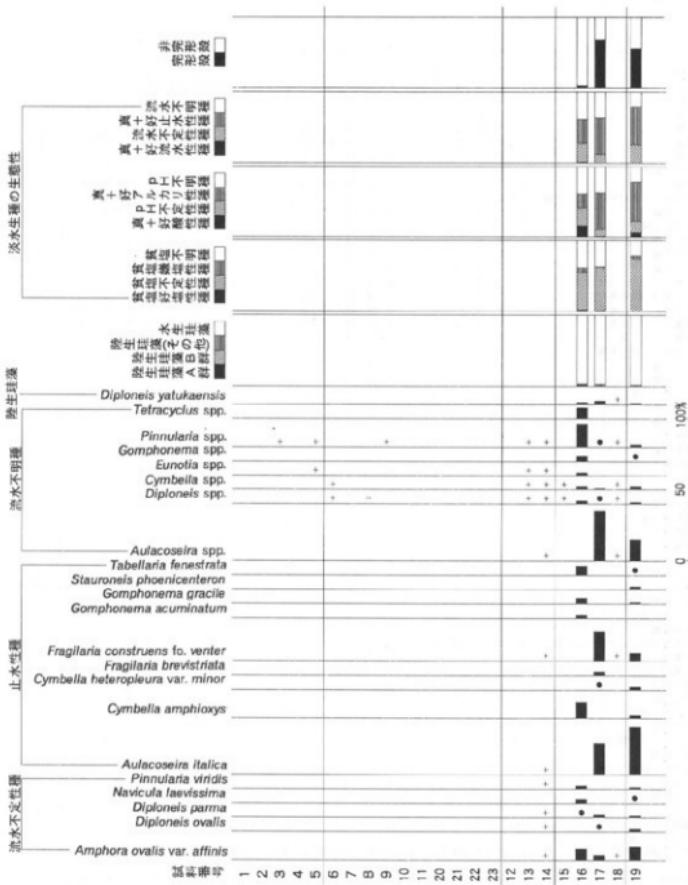
結果を第4表・第14図に示す。全般的に珪藻化石の産出に乏しく、古環境解析に充分な量の化石が産出したのは試料番号19・17・16の3試料である。その他の大部分の試料は、無化石か数個体産出する程度である。化石が産出した試料の完形率は試料により差があり、試料番号19・17は56~70%と高かったが、試料番号16はほとんどが壊れていた。

淡水生種の生態性の特徴は、塩分に対する適応性では貧塩不定性種、pHに対する適応性では真・好アルカリ性種、流水に対する適応性では真・好止水性種が優占する。産出種の特徴は、いずれも近似している。好止水性で浮遊性の*Aulacoseira italica*、流水に対する生態性が不明な*Aulacoseira* spp.が多産し、好止水性で浮遊性の*Fragilaria construens* f. o. ventri、流水不定性の*Amphora ovalis* var. *affinis*などを伴う。なお、珪藻化石の産出の少ない大部分の試料は、化石の保存が悪く溶解したり壊れていた。

(2) 花粉化石

結果を第5表・第15図に示す。以下に地点別の花粉化石群集について述べる。

各地区の花粉・胞子化石の保存状態は全体に不良であるが、D地区では比較的保存状態が良い。全体的に組成は近似する。木本花粉はアカガシ亞属、マツ属、ツガ属の出現率が高く、コナラ亞属、スギ属、マツ属などを伴う。各地区とも上位になるとマツ属やツガ属が多産する傾向にある。草本花粉は低率でイネ科やヨモギ属が検出され、ソバ属の花粉化石も少量ながら検出される。



各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率として算出した。なお、●は1%未満、+は100個体未満の種類を示す。

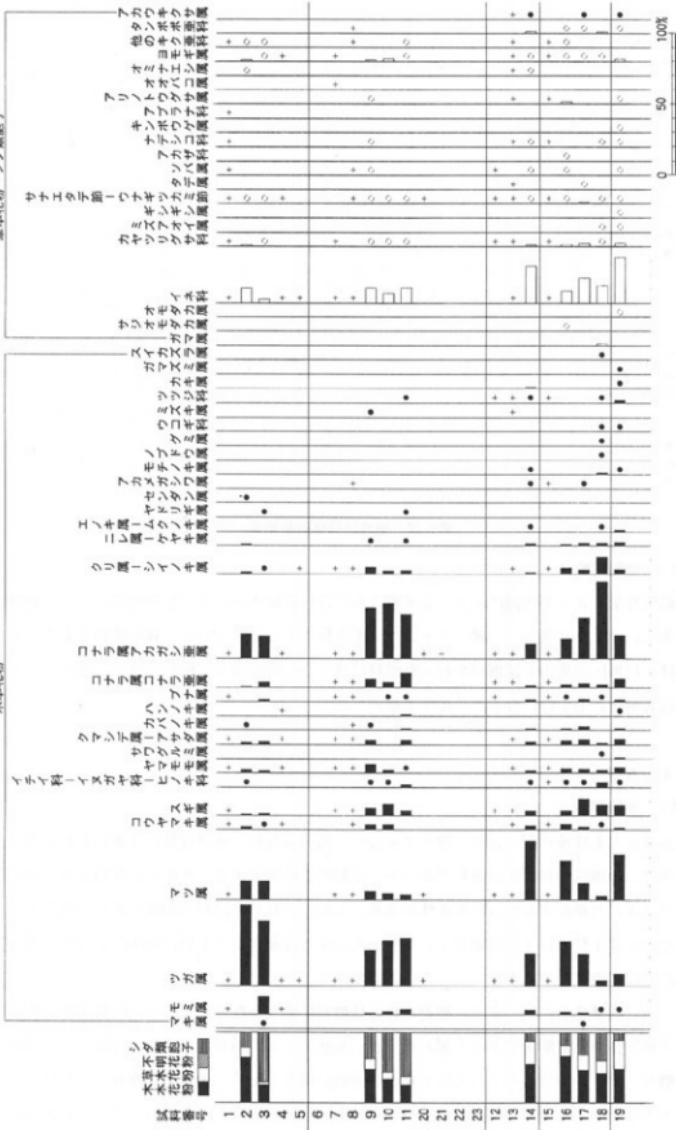
第14図 主要珪藻化石群集

| 種類 | 試料番号 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------|------|-----|-----|-----|-----|-----|---|-----|-----|-----|-----|-----|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|---|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 20 | 21 | 22 | 23 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | |
| 木本花粉 | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | |
| マキ属 | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | | |
| モミ属 | | 2 | - | 25 | 6 | - | - | - | 3 | 3 | 9 | - | - | - | - | - | 8 | - | 5 | 3 | 1 | 2 | - | | |
| ツガ属 | | 2 | 109 | 92 | 20 | 5 | - | 8 | 17 | 67 | 42 | 18 | 2 | - | - | - | 2 | 38 | 57 | 34 | 81 | 52 | 9 | 21 | |
| マツ属 | | 4 | 26 | 27 | - | - | - | 4 | 17 | 6 | 9 | 1 | - | - | - | 5 | 17 | 105 | 2 | 73 | 27 | 7 | 78 | - | |
| コウヤマキ属 | | 1 | 4 | 2 | 1 | - | - | - | 3 | 10 | 5 | - | - | - | - | 1 | 7 | 3 | 10 | 5 | 2 | 4 | - | | |
| スギ属 | | 1 | 2 | 3 | - | - | - | - | 2 | 7 | 15 | 11 | 9 | - | - | - | 1 | 3 | 9 | - | 10 | 28 | 18 | 18 | |
| イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ属 | | - | 1 | - | - | - | - | - | 1 | 1 | 5 | - | - | - | - | - | - | 1 | 1 | 2 | 1 | 8 | 2 | - | |
| ヤマモモ属 | | 1 | 5 | 3 | 4 | - | - | 4 | 4 | 17 | 3 | 2 | - | - | - | - | 5 | 5 | 2 | 9 | 7 | 5 | 10 | - | |
| サワグルミ属 | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | |
| クマシデ属-アサダ属 | | 1 | 3 | 4 | 1 | - | - | 2 | 1 | 8 | - | 7 | - | - | - | - | 1 | 5 | 2 | 7 | 8 | 3 | 9 | - | |
| カバノキ属 | | - | 1 | - | - | - | - | - | 1 | 2 | - | 3 | - | - | - | - | 3 | - | 3 | 7 | - | 4 | - | - | |
| ハンノキ属 | | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | 3 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | |
| ブナ属 | | 2 | - | 3 | - | - | - | 3 | 1 | - | 1 | 1 | - | - | - | 1 | - | 4 | 2 | 2 | 4 | 1 | 4 | - | |
| コナラ属-コナラ属 | | - | 2 | 8 | - | - | - | 4 | 4 | 16 | 5 | 24 | - | - | - | - | 1 | 5 | 4 | 3 | 6 | 7 | 5 | 15 | |
| コナラ属-アカガシ属 | | 12 | 34 | 32 | 13 | - | - | 9 | 24 | 96 | 52 | 73 | 2 | 2 | - | - | 1 | 8 | 27 | 11 | 37 | 68 | 124 | 40 | |
| クリ属-シノキ属 | | - | 3 | 1 | - | - | - | 1 | 10 | 13 | 3 | 6 | - | - | - | - | 1 | 3 | 3 | 11 | 7 | 28 | 8 | - | |
| ニレ属-ケヤキ属 | | - | 2 | - | - | - | - | - | 1 | - | 2 | - | - | - | - | - | 4 | - | 3 | 5 | 5 | 7 | - | - | |
| エキ属-ムクノキ属 | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | |
| ヤドリギ属 | | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | |
| センダン属 | | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | |
| アカメガシ属 | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | 1 | - | - | - | - | - | |
| モチノキ属 | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | 3 | 1 | - | - | - | |
| ノブドウ属 | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | |
| グミ属 | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | |
| ウツギ科 | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | |
| ミネ科 | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | |
| ジジ科 | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | 4 | 1 | 1 | - | 2 | 5 | - | |
| カズミ属 | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 3 | - | - | - | - | - | - | - | |
| スカスラ属 | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | |
| 草本花粉 | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | |
| ガマ属 | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | |
| サンオモダカ属 | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | |
| オダカ属 | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | |
| イキ科 | | 18 | 31 | 19 | 6 | 1 | - | 5 | 17 | 59 | 27 | 94 | - | - | - | - | 23 | 115 | 7 | 33 | 87 | 65 | 159 | - | - |
| カタツリグサ科 | | 1 | 3 | 2 | - | - | - | 1 | - | 4 | 3 | 1 | - | - | - | 3 | 2 | 5 | 2 | 6 | 12 | 2 | 13 | - | |
| ミズオイ科 | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 2 | 2 | - | - | - | |
| ギンシ属 | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | |
| サエタデ科-ウナギツカミ節 | | 3 | 2 | 2 | 2 | - | - | - | 1 | 3 | 3 | 2 | 1 | - | - | 2 | 1 | 3 | 5 | 2 | 2 | 4 | 3 | - | |
| タデ属 | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 3 | - | - | - | - | - | - | - | - | |
| ソバ属 | | 5 | - | - | - | - | - | - | 4 | 4 | - | - | - | - | - | 1 | 2 | - | 2 | - | - | - | 1 | - | |
| アカバ科 | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | |
| ナデコ科 | | 1 | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | 1 | 3 | 1 | - | - | 1 | 2 | - | - | |
| キボウゲ属 | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | |
| アブナ科 | | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | |
| アリトウウグサ属 | | - | - | - | - | - | - | - | 5 | - | - | - | - | - | - | 1 | - | 3 | 5 | - | 4 | - | - | - | |
| オオハコ属 | | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | 1 | 2 | - | - | - | - | - | - | |
| オニアシ属 | | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | 2 | - | - | - | - | - | - | |
| ヨモギ属 | | - | 3 | 2 | 1 | - | - | 1 | - | 6 | 7 | 5 | - | - | - | - | 1 | 2 | 1 | 2 | 3 | 5 | 7 | - | |
| 他のキク科 | | 3 | 1 | 1 | - | - | - | 1 | - | 1 | - | 3 | - | - | - | - | 3 | - | 6 | 1 | - | - | - | - | |
| タンポポ科 | | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | 6 | - | 2 | 1 | 6 | 4 | - | - | |
| シダ類 | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 2 | 3 | - | - | 2 | - | 1 | - | |
| アカウキサ属 | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | |
| 他のシダ類 | | 332 | 61 | 537 | 341 | 233 | 9 | 78 | 191 | 204 | 216 | 345 | 43 | 5 | 28 | 17 | 73 | 200 | 50 | 158 | 67 | 146 | 207 | 51 | - |
| 合計 | | 350 | 295 | 765 | 396 | 540 | 9 | 123 | 292 | 551 | 388 | 883 | 49 | 7 | 25 | 17 | 91 | 322 | 440 | 248 | 381 | 486 | 525 | 491 | - |
| 比率(不明を除く) | | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | |

第5表 花粉分析結果

木本花粉

草本花粉・シダ類胞子



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除いて算出した種類を示す。
百分率で算出した。なお、○●は1%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

第15図 主要花粉化石群集

| 種類 | 試料番号 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------------------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|-----|----|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 20 | 21 | 22 | 23 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 |
| イネ科葉表面細胞壁膜体 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| イネ族イネ属 | 38 | 10 | 6 | 4 | - | 60 | 15 | 14 | 12 | 4 | 10 | - | - | - | - | 70 | 40 | 14 | 13 | 22 | 23 | 1 | 26 | |
| キビ族 | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | |
| タケ亜科 | 91 | 113 | 112 | 97 | 175 | 102 | 193 | 152 | 119 | 129 | 132 | 194 | 132 | 205 | 191 | 101 | 175 | 161 | 131 | 104 | 118 | 7 | 149 | |
| ヨシ属 | 22 | 15 | 6 | 16 | - | 2 | 13 | 11 | 4 | 15 | 25 | 5 | - | - | 2 | 1 | - | 2 | - | 5 | - | 4 | | |
| ウシクサ族コブナグサ属 | 1 | - | 4 | 7 | 2 | 2 | 3 | 8 | 6 | 8 | 9 | 2 | 2 | - | 1 | 2 | 6 | 8 | 4 | 2 | 5 | - | 3 | |
| ウシクサ族スキ属 | 15 | 10 | 21 | 24 | 9 | 18 | 24 | 17 | 18 | 32 | 42 | 2 | 7 | 4 | - | 10 | 10 | 16 | 14 | 16 | 20 | - | 9 | |
| イチゴツナギ亜科 | 9 | 4 | 3 | 5 | 1 | 10 | 7 | 5 | 7 | 4 | - | 6 | 1 | 2 | 8 | 2 | 13 | 3 | 10 | 4 | 2 | 1 | 9 | |
| 不明キビ型 | 27 | 14 | 21 | 20 | 7 | 26 | 16 | 12 | 16 | 34 | 28 | 3 | 11 | 5 | 22 | 20 | 28 | 32 | 31 | 23 | 29 | 1 | 19 | |
| 不明ヒゲサ型 | 21 | 24 | 42 | 23 | 12 | 13 | 30 | 29 | 28 | 28 | 31 | 14 | 2 | 7 | 13 | 10 | 24 | 24 | 28 | 29 | 28 | 1 | 21 | |
| 不明ダンチケ型 | 18 | 22 | 7 | 16 | 12 | 11 | 23 | 13 | 20 | 16 | 21 | 8 | 1 | 5 | 9 | 8 | 16 | 23 | 29 | 17 | 22 | - | 14 | |
| イネ科葉表面細胞壁膜体 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| イネ族イネ属 | 36 | 60 | 26 | 22 | 2 | 50 | 21 | 37 | 24 | 16 | 25 | - | - | - | - | 36 | 54 | 47 | 44 | 52 | 50 | 1 | 52 | |
| タケ亜科 | 43 | 71 | 53 | 55 | 84 | 51 | 51 | 59 | 61 | 63 | 77 | 76 | 75 | 82 | 38 | 39 | 30 | 26 | 65 | 30 | 2 | 39 | | |
| ヨシ属 | 4 | 5 | 3 | 12 | 11 | 3 | 6 | 15 | 2 | 9 | 13 | 2 | 3 | 2 | - | 4 | 1 | 2 | - | - | - | 2 | | |
| ウシクサ族 | 10 | 12 | 14 | 25 | 19 | 26 | 24 | 20 | 22 | 12 | 19 | 15 | 4 | 10 | 12 | 9 | 18 | 14 | 17 | 34 | 10 | 1 | 5 | |
| シバ属 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | 1 | - | - | - | - | |
| 不明 | 20 | 71 | 58 | 61 | 32 | 31 | 33 | 11 | 42 | 21 | 35 | 10 | 30 | 16 | 12 | 49 | 16 | 30 | 25 | 30 | 14 | 1 | 10 | |
| 合計 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| イネ科葉表面細胞壁膜体 | 242 | 218 | 222 | 217 | 219 | 238 | 329 | 256 | 226 | 271 | 298 | 234 | 216 | 228 | 246 | 224 | 312 | 283 | 269 | 213 | 256 | 11 | 254 | |
| イネ科葉表面細胞壁膜体 | 118 | 210 | 154 | 173 | 148 | 161 | 135 | 134 | 129 | 115 | 155 | 104 | 113 | 103 | 108 | 124 | 131 | 122 | 115 | 183 | 104 | 5 | 108 | |
| 総計 | 360 | 437 | 376 | 390 | 367 | 399 | 464 | 390 | 355 | 390 | 453 | 338 | 329 | 331 | 354 | 348 | 443 | 405 | 375 | 396 | 360 | 16 | 362 | |
| 組織片 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| イネ属 | 16 | 3 | - | 1 | - | 14 | 3 | 8 | - | - | - | - | - | - | - | - | 4 | 10 | 1 | 2 | 2 | 5 | - | 1 |
| イネ属短細胞列 | 5 | - | - | - | - | 9 | 2 | - | 1 | 1 | - | - | - | - | - | 8 | 5 | - | 3 | - | - | - | - | |
| その他 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 樹木起源(NV) | - | - | - | - | 11 | - | - | - | 3 | - | - | - | - | - | - | - | 3 | 3 | 3 | 6 | - | - | | |

第6表 植物珪酸体分析結果

(3) 植物珪酸体

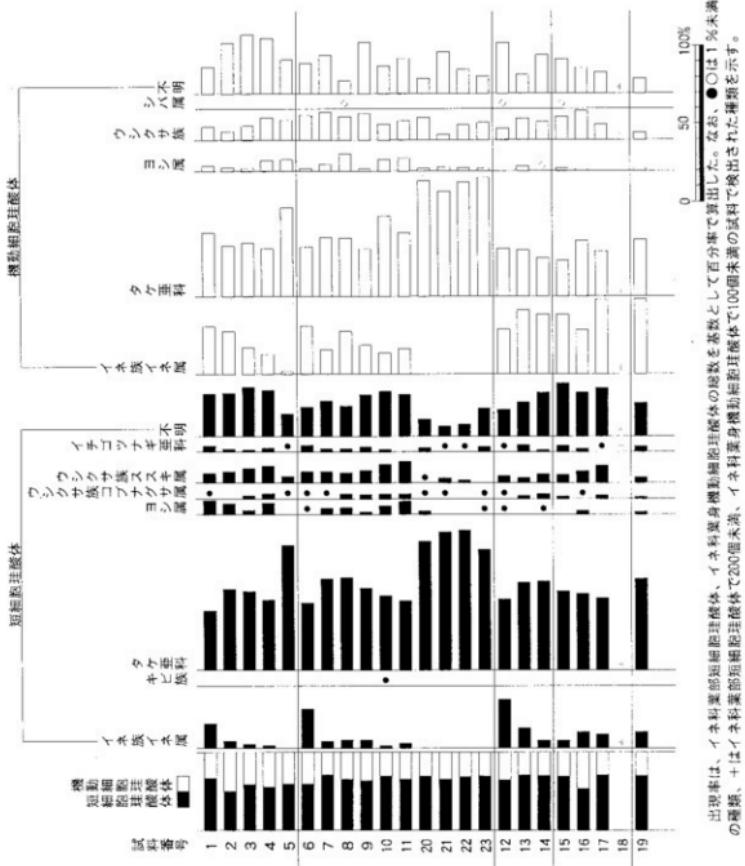
結果を第6表・第16図に示す。各地点とも良好に検出される。どの地点ともタケ亜科が多く、ウシクサ族、ヨシ属、イチゴツナギ亜科などを伴っている。栽培植物であるイネ属は、C地区の地山で深掘りを行った試料以外から比較的高率に検出される。なお、イネ属は各地区とも上位になると多産する傾向がある。

4 考察

(1) 堆積環境

各地区とも珪藻化石の含有が極めて少なく、古環境解析に充分な量の珪藻化石が産出したのは、D地区のわずか3試料であった。全般的に砂質であることから、堆積速度が速く取り込まれた量が少なかった可能性がある。なお、これらの試料の淘汰が悪いことを考えると、シルト粒子以下の微細粒子と挙動を共にする珪藻化石（小杉, 1989）が完全に流失したとは考えにくい。

一方、珪藻化石と同じように植物が作る珪酸物に植物珪酸体がある。イネ科植物が生産する植物珪酸体は膨大であると思われるが、風化によって短期間のうちに分解し、土壤の珪酸サイクルの中に組み入れられて粘土の形成に関与したり、植物に再吸収されたりすることが指摘されている（近藤, 1988a）。今回の分析結果ではタケ亜科が多い。タケ亜科は生産量が多く、また風化にも強いことから（近藤, 1982；杉山・藤原, 1986）、沖積低



第16図 植物珪酸体群集

出現率は、イネ科葉部運動細胞壁抗原體、イネ科葉身機動細胞壁抗原體の発生を百分率として百分率で示出した。なお、●○は1%未満の種類、+はイネ科葉部運動細胞壁抗原體で200箇未満、イネ科葉身機動細胞壁抗原體で100箇未満の試料で検出された種類を示す。

地をはじめとする堆積物中では多く検出される。このようなタケ亜科の特性を考えると、実際周辺に生育していた量よりも過大評価されている可能性があり、風化が進んだ土壌であることがいえる。さらに、段丘堆積物では古い段丘ほど土壌の風化が進んでいることが指摘されており（若月, 1979）、これらのことから、珪藻化石が風化により消失した可能性がある。

珪藻化石の保存が比較的良好な試料では、好止水性で浮遊性の *Aulacoseira italica*、*Fragilaria construens* fo. *venter* が多産し、流水域を指標する流水性種は非常に少なかった。このうち、後種は有機汚濁の進んだ腐水域に耐性のある好汚濁性種の一一種 (Asai, K. & Watanabe, T., 1995) であり、前種も汚濁した富栄養水域に普通に認められる種類である。これらの試料が採取された地点は落ち込みあるいは流路とみられる凹んだ地点であり、後述するように奈良時代以降稻作地として利用されたことが示唆されている。稲作にともなう施肥などの影響を反映する可能性がある。さらに時代等を考慮すれば、付近のため池からの導入が行われた可能性もある。

(2) 奈良時代～中世の古植生

今回得られた花粉化石群集は、異なる調査区から採取した試料でも同時期とみられる堆積物では共通した組成を示しており、比較的広域的な植生変化を反映していると考えられる。以下に、時代別の古植生について検討する。

奈良時代あるいはそれ以前の自然流路の堆積物では、アカガシ亜属が優占しクリ属—イノキ属を伴う。したがって、当時の森林植生はカシ類・シイ類による暖温帶性常緑広葉樹林、いわゆる照葉樹林であったと推定される。これは、绳文時代の海進最盛期以降の大阪平野の潜在自然植生に近い植生と考えられることから、この時期はまだ人間の植生干渉の影響は顕著でなかったものと思われる。

奈良時代の遺物包含層になると、アカガシ亜属が減少してツガ属、マツ属などの針葉樹が増加する。マツ属は陽樹で二次林の主要構成要素である。ツガ属は後背の山地に由来する植物であろう。この時期には、木炭を生産した炭窯と推定される小型窯状遺構多数で構成される長池窯跡群が小山田丘陵上に展開している。当地域は中世から白炭の産地として知られるが、これらの窯跡群の存在よりその起源は奈良時代までさかのぼることが指摘されている（河内長野市史編修委員会, 1994）。植生の変化は、このような人為的影響による可能性がある。

中世の耕作土とされる堆積層では、花粉化石の保存状態が悪く、植生に関する情報を得ることはできなかった。しかし、同じ段丘面上に位置する上原遺跡では、室町時代とされる層準でマツ属が多産する結果が得られていることから、中世頃にはマツ属による二次林がさらに拡大していた可能性がある。

(3) 栽培植物について

奈良時代～中世の堆積層では、イネ属の珪酸体が普遍的に産出し、かつ出現率も最大で50%検出される。植物珪酸体から水田耕耘を推定している例は多いが、現水田土壤中の植物珪酸体の調査によれば、機動細胞珪酸体中のイネ属の割合は9%であるが、従統的に稲葉を堆肥として与えている水田では16%に達するという結果が得られている（近藤、1988b）。今回の出現率は、この結果を大幅に上回っており、当時稻作が行われていたと考えられる。さらに、珪藻化石の結果から、施肥などによる富栄養化が示唆される。一方、ソバ属の花粉化石も検出されており、奈良時代～中世頃にイネとともに栽培されていたと考えられる。

5まとめ

今回の分析結果から、奈良時代および中世には、遺跡内で稻作が行われていたことが示唆される。また珪藻化石の結果から、施肥などによる水域の富栄養化やため池からの導水が推定された。先にも述べたように段丘堆積物は風化が進んでいる場合が多く、微化石の検出も悪いことが多い。今回、必ずしも保存が良かったわけではないが、微化石がある程度検出された背景には、嫌気的な状況下で微化石の風化が抑制された可能性がある。

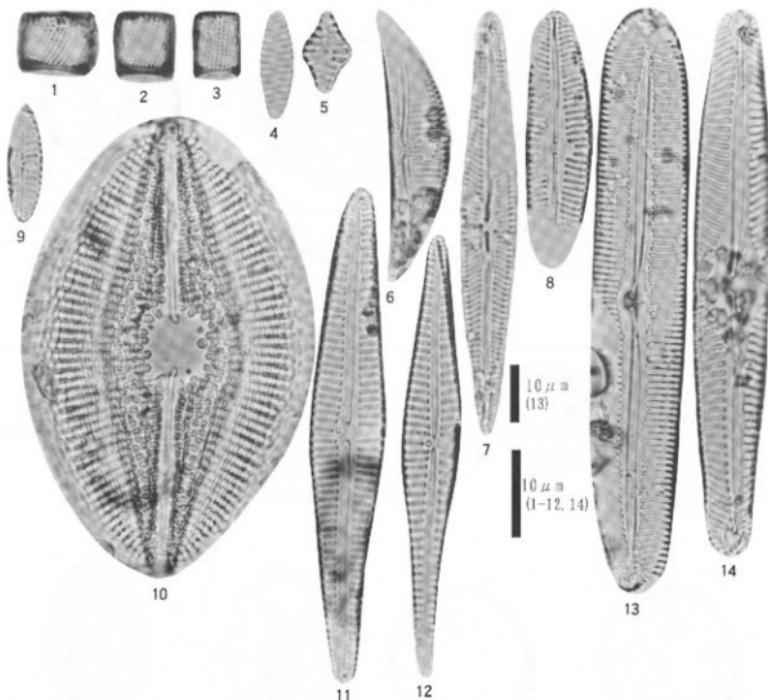
奈良時代以前の森林植生はカシ類・シイ類による暖温帯常緑広葉樹林、いわゆる照葉樹林であった。しかし、奈良時代以降に炭の原料木の採取や農耕地拡大に伴う伐採などの人為的な植生干渉により、植生が二次林化しマツ属が増加していった可能性がある。

今回の分析調査により、周辺植生と人間活動との一端を明らかにすることができた。今後は周辺遺跡の調査事例を蓄積し、時空的な変異を把握するとともに、周辺に分布するため池自体についても調査を進めていきたい。

〈引用文献〉

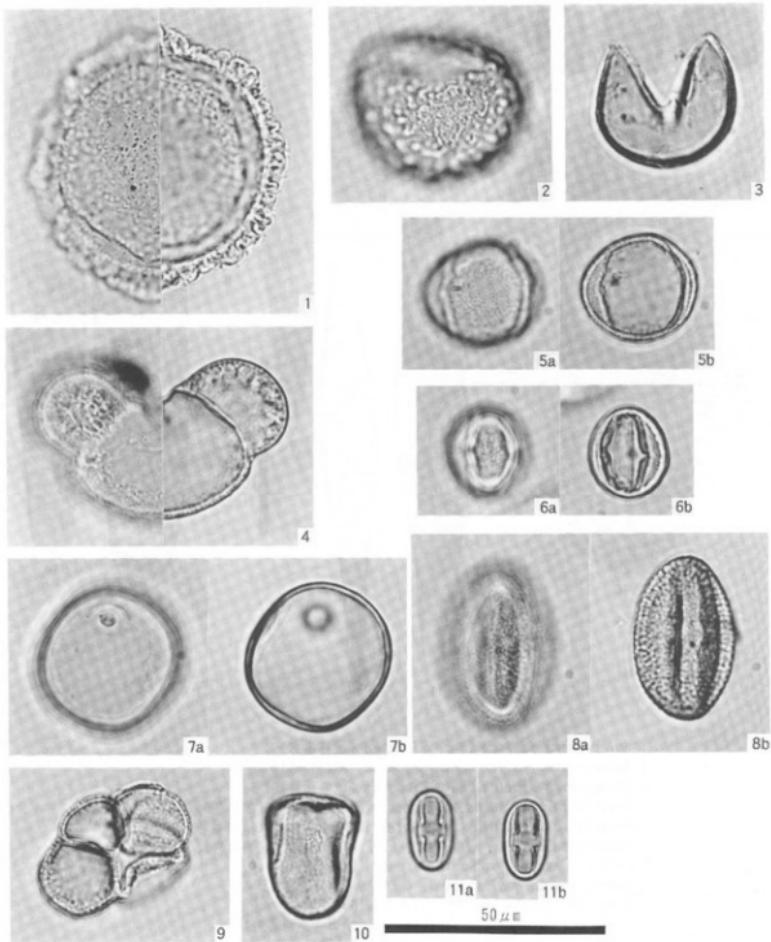
- Asai, K.& Watanabe, T.(1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35-47.
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, p.73-88.
- 伊藤良永・堀内誠志 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 硅藻学会誌, 6, p. 23-45.
- 河内長野市史編修委員会 (1994) 河内長野市史 第1巻(上) 本文編 考古. p.669. 河内長野市役所.
- 小杉正人 (1989) 硅藻化石群集の形成過程と古生態解析. 日本ベントス研究会誌, 35/36, p.17-28.
- 近藤鍊三 (1982) Plant opal分析による黒色腐殖層の成因究明に関する研究. 昭和56年度化学研究費 (一般研究C) 研究成果報告書, 32p.
- 近藤鍊三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析、その特性と応用. 第四紀研究, 25, p.31-64.
- 近藤鍊三 (1988 a) 植物珪酸体 (Opal Phytolith) からみた土壤と年代. 第27回ペドロジストシンポジウム 土壤生成と時間 資料集, p.17-22.
- 近藤鍊三 (1988 b) 十二遺跡土壤の植物珪酸体分析. 「御代田原遺跡跡群 十二遺跡 一長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書一」. p.377-383. 御代田町教育委員会.

- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.(1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.(1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariophyceae, Suriellaceae. Band 2/2 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.(1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaeae, Eunotiaceae. Band 2/3 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.(1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K.(1992) PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26, p. 1 – 353. BERLIN-STUTTGART.
- 杉山真二・藤原宏志(1986)機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—. 考古学と自然科学, 19, p.69–84.
- 若月利之(1979)冲積および洪積土壤の風化度評価法. ベトロジスト, 23 (1), p.23–42.



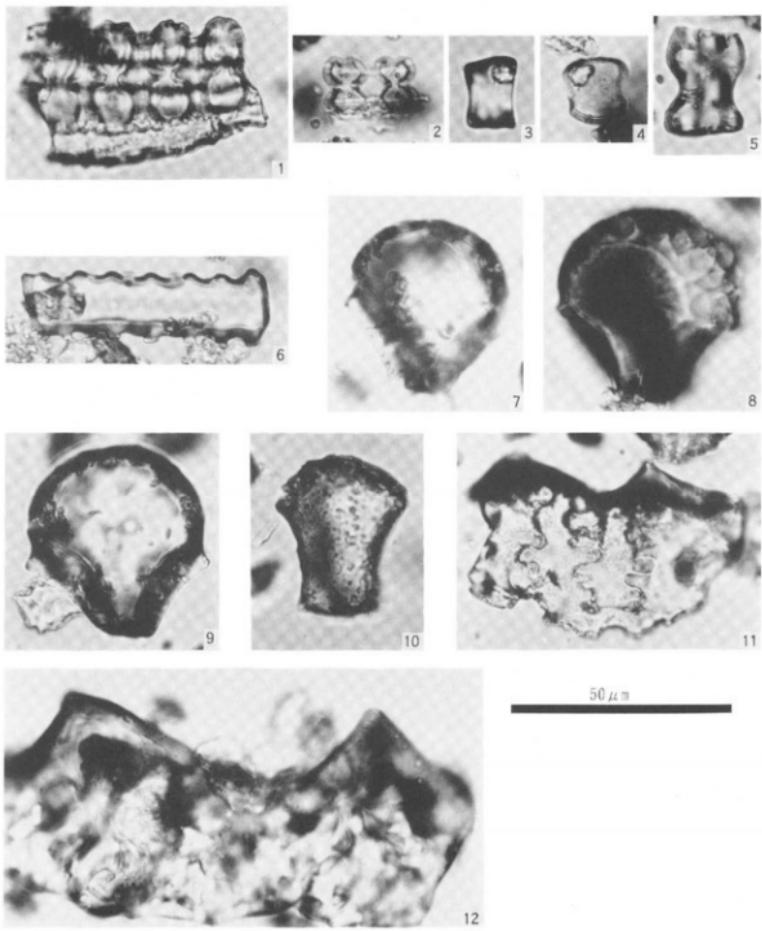
1. *Aulacoseira italica* (Ehr.) Simonsen (試料番号19)
2. *Aulacoseira italica* (Ehr.) Simonsen (試料番号14)
3. *Aulacoseira italica* (Ehr.) Simonsen (試料番号19)
4. *Fragilaria construens* fo. *venter* (Ehr.) Hustadt (試料番号14)
5. *Fragilaria construens* fo. *venter* (Ehr.) Hustadt (試料番号19)
6. *Amphora ovalis* var. *affinis* (Kuetz.) Grunow (試料番号16)
7. *Cymbella amphioxys* (Kuetz.) Grunow (試料番号16)
8. *Cymbella subaequalis* Grunow (試料番号14)
9. *Cymbella sinuata* Gregory (試料番号16)
10. *Diploneis yatukaensis* Horikawa et Okuno (試料番号18)
11. *Gomphonema gracile* Ehrenberg (試料番号16)
12. *Gomphonema gracile* Ehrenberg (試料番号16)
13. *Pinnularia macilenta* (Ehr.) Cleve (試料番号16)
14. *Pinnularia gibba* Ehrenberg (試料番号19)

第17図 珪藻化石



1. ツガ属(試料番号19)
 3. スギ属(試料番号19)
 5. コナラ属コナラ亜属(試料番号19)
 7. イネ科(試料番号19)
 9. ガマ属(試料番号18)
 11. クリ属—シノノキ属(試料番号18)
2. コウヤマキ属(試料番号19)
 4. マツ属(試料番号19)
 6. コナラ属アカガシ亜属(試料番号19)
 8. ソバ属(試料番号19)
 10. カヤツリグサ科(試料番号19)

第18図 花粉化石



1. イネ属短細胞列(試料番号6)
3. タケア科短細胞珪酸体(試料番号6)
5. コブナグサ属短細胞珪酸体(試料番号4)
7. イネ属機動細胞珪酸体(試料番号4)
9. イネ属機動細胞珪酸体(試料番号13)
11. イネ属顆粒珪酸体(試料番号13)
2. イネ属短細胞列(試料番号12)
4. ヨシ属短細胞珪酸体(試料番号12)
6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(試料番号19)
8. イネ属機動細胞珪酸体(試料番号6)
10. タケア科機動細胞珪酸体(試料番号6)
12. イネ属顆粒珪酸体(試料番号1)

第19図 植物珪酸体

第4章　まとめ

本次調査区は1994年度に実施した東側の調査区（TKO94-1）と結ぶとほぼ一直線上に繋がる。これらの調査区の位置は、高向遺跡が位置する石川左岸の中位段丘の北西方向のほぼ両端を結ぶものである。このことから、本次調査の実施は既往の調査の成果と合わせて、石川左岸の中位段丘上の遺跡の在り方、高向遺跡の東西幅、土地利用の区分を知る具体例として大きな成果があった。

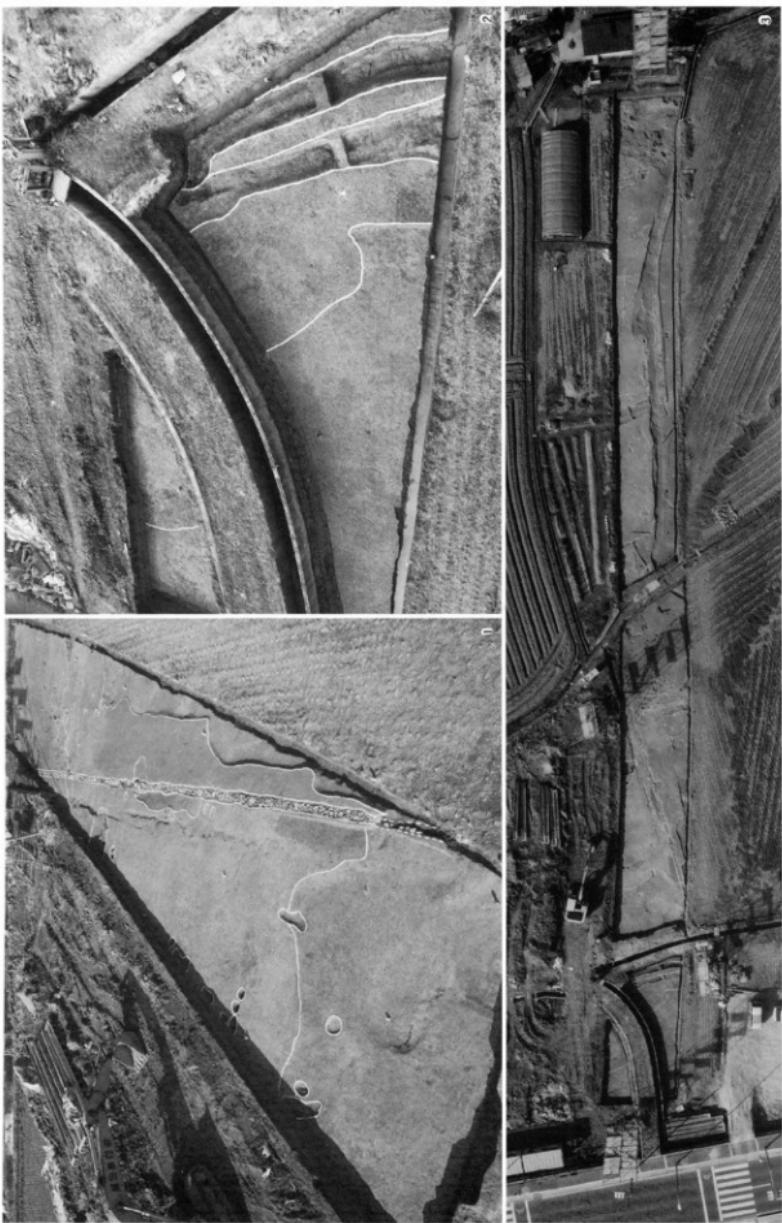
調査の結果、調査区は土層断面から石川左岸の中位段丘上の後背湿地に位置していることが確認された。奈良時代の包含層中の花粉分析では稲作を行っていた可能性が得られ、TKO94-1の調査成果と合わせるとその範囲は、小山田丘陵東側裾部である本次調査区の西端からTKO94-1で検出された飛鳥時代から奈良時代の掘立柱建物群の西側(調査区の中央)付近まで及び、約250m幅である。

また、奈良時代前後から、NR1の自然流水に運ばれた土砂により湿地の埋没が進み、微高地に中世の遺構が営まれることもわかった。

奈良時代の包含層からの遺物は、汎調査区にわたり散在的に出土する。このことは遺物がNR1等の自然流水によりもたらされ、地形的に調査区の南側付近から流されてきたと考えらる。今後の調査ではNR1内と同様、湿地内に位置していても微高地などの立地条件であれば、中世のみならず奈良時代の遺構がまとまって検出されることが予想される。

道路の開通後は高向遺跡での開発は益々増加し、調査の機会も増加することが予想されるが、より一層の文化財保護と資料の増加が望まれる。

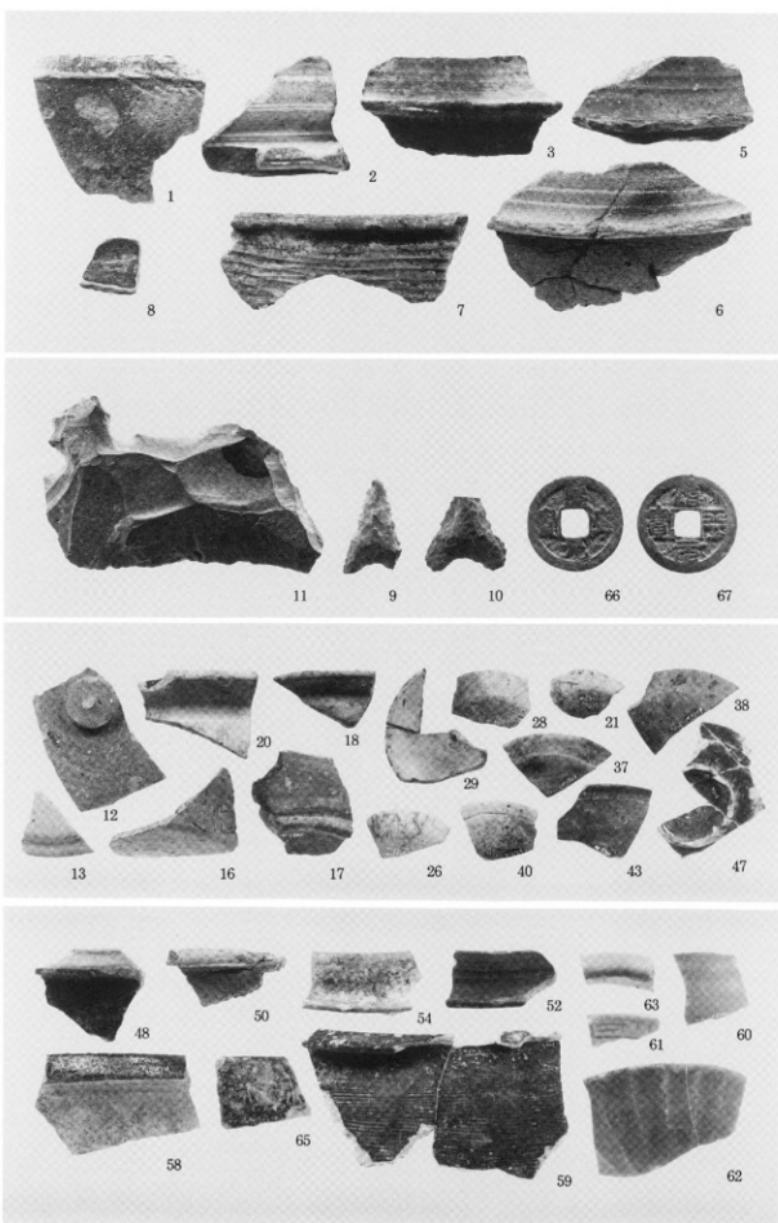
図 版



1. NRI 1 (南東から)、2. SD12・13 (東から)、3. 調査区全景（上から）



SD 9 (北西から)



SD 9 (1~3・5~7)、SD 12 (8)、包含層 (9~13・16~18・20・21・26・28・29・37・38・40・43・47・48・50・52・54・58~63・65~67)

報告書抄録

| | |
|--------|---------------------------------------|
| ふりがな | たこういせき |
| 書名 | 高向遺跡 |
| 副書名 | 河内長野市遺跡調査会報 III |
| シリーズ名 | 河内長野市遺跡調査会報 |
| シリーズ番号 | III |
| 編著者名 | 尾谷雅彦 烏羽正剛 |
| 編集機関 | 河内長野市遺跡調査会 |
| 所在地 | 〒586 大阪府河内長野市原町396-3 TEL 0721-53-1111 |
| 発行年月日 | 1997年3月31日 |

| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|----------------|--|-------|------------|-------------------|--------------------|-------------------------------|---------------------|------|
| | | 市町村 | 遺跡 | | | | | |
| たこういせき 高向遺跡 | おおさかふかわちながの し 大阪府河内長野市 たこう 高向 | 27216 | 府23 河19 | 34° 26' 07" | 135° 33' 00" | 1995.10.30 ↓ 1995.12.22 | 1,300m ² | 市道整備 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|-------|----|--------------|---------|---|------------------------|
| 高向遺跡 | 集落 | 奈良時代 鎌倉時代 | 土坑、溝、暗渠 | 土師器、須恵器 土師質土器 須恵質土器 瓦器、瓦質土器 青磁、石器 | 高向氏と関連のあると考えられる稻作地での調査 |

河内長野市遺跡調査会報題
高向遺跡

1997年3月31日発行

発行 大阪府河内長野市原町396-3

河内長野市遺跡調査会

0721-53-1111

印刷 株式会社中島弘文堂印刷所
